

よくないことだと思う。

「リスとネズミはぜんぜん違う動物だと思っていたけど、リスはよく見ると尻尾がふさふさしているだけで、ネズミと同じだ。光にすけて見えた尻尾にはネズミと同じ軸が見えてそう思った」という人がいた。当たっているところがある。このように、動物に対する感じ方に影響する要因はそうとうに複雑なものだということであろう。

カヤネズミというネズミ

そうした野生のネズミのうちでも、きれいでとびきりかわいらしいネズミがいる。その小ささときたら、体重は10グラムもないから500円硬貨ひとつほどだ。大きさは頭から尾の付け根までが6センチメートルほど、尾が長くて7センチメートルほどだ。体の色はうすい茶色で、つぶらな目が愛らしい。冒頭に紹介したように、この名前は「茅場にすむネズミ」という意味で、茅つまりスキやオギなど大型のイネ科群落に暮らしている（畠、2014）。



カヤネズミ

英語では harvest mouse つまり「収穫のネズミ」という意味だ。麦畑などにいるからそう呼ばれるのであろうか。いずれにしても「森のネズミ」ではなく、草原のネズミである。小さくて尾が長いからイネ科の茎のあいだを巧みに移動できる。それが可能なのは、ひとつには手の指が細長くものを握りやすいこと、とくに後足の指は親指と小指にあたる両端のものが外向きについているので、茎などをつかみやすいからだ。もうひとつは、長い尾がたくみに動き、茎などにかまって体重を支えることができるからである。

とくに特徴的なのは、イネ科の草を編んで、まるで鳥の巣のような、野球のボールほどの球状の巣を作ることである。イネ科の葉は基本的に細長い。カヤネズミは適当な茎を数本選び、葉を編んで空中に浮かんだような巣を作る。この巣は非常に印象的なので、カヤネズミそのものの姿を見なくても巣を見つかることで生息が確認できる。巣を作るのに使われるのは、スキ、オギのような大型のイネ科だけでなく、チガヤ、ネコジャラシ（正しくはエノコログサ）などで、イネ科



ボール状の巣と、そこから顔をのぞかせるカヤネズミ
(Erni/shutterstock.com)



カヤネズミの後足

ではないがやはり細長い葉をもつスゲの仲間も使うことがある。日本のカヤネズミが巢材に使った植物はこれまでに50種もが記録されている(畠, 2014)。

ボール状の巢だから、ジュウシマツなどのような鳥の巢と似ているといえは似ているが、鳥の巢は外から巢材を運んできて作るのに対して、カヤネズミはその場にある葉を編むという点でまったく違う。

最近の石若礼子さんの九州での研究では、こういうボール状の巢だけでなく、地上に皿のような巢も作ることがわかってきた。

カヤネズミはこういう巢で出産し、子育てをする。巢はひとつではなく、2、3個の「別邸」もあるらしい。ただし出産、子育てするのはそのうちのひとつで、数匹がまとまった場所で巢を作る。子育てといってもネズミの成長は速いから、生後18日くらいで巣立ちする。カヤネズミは生後10日くらいで別の巢に引越しをするという(畠, 2014)。理由はよくわからないが、ダニなどが増えるのを嫌うのかもしれないらしい。

カヤネズミは体重が10グラムもないほどのミニサイズのネズミである。体が小さいから食べる量も少ないので楽だと思いがちだが、そういうことはない。というのも、体重が軽い動物ほど「体重あたりの必要量」は大きくなるから、必要な食物の重さそのものは小さいが、体重との比率でいえば大きい。そのため、起きているあいだはかなりの時間を食べることに費やさなければならぬが、それにも限界があるから、栄養価のある良質な食物を食べる必要がある。鳥でもハチ

ドリというミニサイズの鳥は花の蜜のような良質な食べ物を、一日中摂り続けなければならない。カヤネズミもこれと同様である。私たちが調べたところ、カヤネズミはイネ科の種子や昆虫などを食べることがわかった。あの小さなネズミがバッタなどをつかまえて食べるのは意外な気もするが、そのほうが理にかなっている。